



War Cry

11月号

福音版
2024
November
No.2878

二〇二四年 十一月一日発行

明治二十八年創刊

福音版・毎月一日発行 広報版・奇数月十五日発行

あなたには 帰る所がある

大里 忠弘

じて腹を立てたのです。

聖書にある「放蕩息子」の物語（ルカによる福音書15章11〜32節）をご存じですか。二人兄弟のうちの弟が、父親から生前贈与を受けた財産を持って家を出て散財したあげく、食うに困って父親のもとに帰って来る物語です。

を抱き、接吻した」のです。父親は連日、道の彼方を眺めて、息子の姿を捜したのでしょう。その姿を見つかるや駆け寄り、一番良い服、指輪、履物、さらに肥えた子牛を屠って宴会を開きます。そこに一日の仕事を終えた兄が戻ってきます。宴会の事情を知った兄は家に入ろうとしません。弟が帰ってきたことを喜ばず、父の態度に不公平なものを感

この弟息子が皆さんの身内にいたらどうでしょう。親の財産を使い果たし、好き勝手なことに明け暮れ、家族にさんざん迷惑をかけた者が困り果てて戻って来たとして、何もなかったように許すことができるでしょうか。いくら何でも人が良すぎます。兄の怒りももつともです。父親の非常識さが際立つ展開です。物語の焦点は、この非常識さにあります。放蕩息子を受け入れる父親の、非常識なまでの愛。この世の常識とは別の、神の国はこういう所だという話なのです。

弟息子は食べるものもなく困り果て、我に返ります。自分の不甲斐なさを認めるのです。

自分が何をしてよいか、どう生きたらよいかわからない。その答えを求めて迷う様子を自分探しと表現します。本当の自分とは、その人自身の内にあるのだと思えますが、今の自分に満足できず、自分を受け入れられない人は、外に自分を求めます。誰かと比べて嫉妬したり、自分を蔑んだりします。外に自分を求めても決して見つかりません。自分に目を向け、内省することではじめて、神からいただいた本当の自分を受け入れることができるのです。非常識なまでに徹底的に人を愛してくださる神は、悔い改めて神のもとに立ち帰る者を、「死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」と言っている、何の条件もつけずに迎えてくださいます。

私は、自分が放蕩息子であつたという感覚はありません。むしろ、親元で何不自由なく暮らし、守られていた兄のほうだと思います。神はひと時も私を見放すことなく、見守っていてくださったのだと思います。

放蕩息子を非常識なまでに愛してくださる神は、どのような人でも迎えてくださいます。放蕩する、しな

いに関係なく、弟も兄も関係なく、我に返った者を同じように迎え入れてくださるのです。我に返る、本来の自分に返るといえるのは、神が自分に与えてくださった姿を受け入れるということです。その時、神のもとに帰るのです。「自分は仏教の家に生まれたから、帰るのは神の所ではない」と言う人もいます。しかし、私たち人間は一人残らず、父なる神から命を与えられたのです。どんな宗教的背景があろうが、神から見れば皆一緒です。すべての人にとって、帰る所は父なる神の所です。

この背景には、キリストの十字架という事実があります。神の御子イエス・キリストが、私たちの罪の身代わり十字架にかかって、私たちが父なる神のもとに帰る道を開いてくださったのです。神に背を向け、自分本位に生き、迷いの人生を送っている、周りの人に迷惑をかけるような生き方をしている、自分の無力さに気づき、神に助けを求めるならば、神は両手を広げて何の見返りも求めずに迎え入れてくださいます。ぜひ、教会をお訪ねください。（救世軍桐生小隊「教会」所属）



レンブラント
「放蕩息子の帰還」

「立ち帰れ、悪しき道から」 と語りかけられ ～一人でも多くの受刑者にイエス 様を伝えたい～



2023年、新任士官任命式で
吉田 慎也さん
救世軍士官（伝道者）

刑務所の中でイエス・キリストと出会い、救われた吉田慎也さん。今、救世軍士官（伝道者）としてイエス様を伝える人生を歩んでいます。その救いの経験と神様の導きについての証言です。

刑務所での教誨を通して

私は刑務所の中でキリスト教の神様を信じました。人からよく聞かれるのが「なんでキリスト教なの？」という質問です。その答えは「正直、最初は何でも良かった」ということになり

ます。
刑務所では月に一度、教誨の時間があり、それに出ている間は刑務作業を免除されるのです。刑務所の工場では暑い中で機械作業をするので、教誨に行けば冷房が効いた部屋で過ごせるし、他の受刑者とも話ができます。私はこんな不純な

動機で、十いくつの宗教の教誨に申し込みました。しかし、どれも断られ、最後に残ったのがキリスト教でした。そこに受け入れられ、教誨に出るようになったのは、服役して三年目でした。教誨の時は、毎回、賛美歌「いつくしみ深き」を歌いました。こちらがコソコソ話をしていても、教誨の先生方はニコニコと歌っておられました。そんな姿を見ているうちに、「この人たちは一体何をしたいのだろ

う」と思うようになりました。私が不真面目な態度でも、先生は誠実でした。そのうち、先生が差し入れてくださった聖書を開いてみようと思ひ、読み始めました。書いてあることもよくわからなかったのですが、適当に開いて目に入ったところを読んでいるうちに、「この言葉好きだな」と感じるようになってきて、それが頭に入るようになっていきました。工場で懲罰を受けると独居房に入れられ、教誨に行く権利を剥奪されます。次に教誨に申し込むには、懲罰が終わって三カ月経たなければなりません。また申し込んで通るまでにさらに半年ぐらいかかります。私は規律違反が多く、時々懲罰房に隔離されていました。懲罰で入る独居房は三畳ほどで、歯ブラシ、タオル、箸、コップしか持ち込めません。その中でひたすら正座か安座するだけの生活です。しかし、頭の中にあった聖書の言葉が浮かんできて、ずっとそれを考えながら過ごしていました。そんな中、薬物の禁断症状に苦しんでいました。夜中に目が覚めると身体のある



二十代のころ。暴力団に所属し、思うままに生きていた

ちこちが痛んで、眠ることができないのです。
イエス・キリストとの出会い
ある日、独居房で正座していると、夏の日差しが背中に焼けつくように感じました。悪態をつきながら振り返ると、きれいな十字架の影が畳に映し出されていました。その時、「神様はいるかもしれない」と思い、祈りました。「本当にいるなら、この状態から助けてください。」少ししてから「信じなさい、信じる者になりなさい。その苦しみをわたしに預けなさい」とささや



かれたような気がしました。その晩、また禁断症状が出たら嫌だなと思いながら床に就きました。「こんな状態が続くなら、次の日には死んでいたらいいのに」と思っていました。すると夢の中に、心に留まっていた御言葉が出てきました。
「わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることが喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。」（エゼキエル書33章11節）
夜中に目が覚めると、いつものような身体の違和感がなくなっていることに気づきました。この体験が回心の始まりでした。イエス様は私の救い主だという確信をもちました。
その七カ月後、刑務所内で洗礼を受け、クリスチャンとして生き始めました。洗礼によって劇的に変わったわけではありませんが、心の拠り所が確立されたことで、大きくぶれることはなくなりました。
救世軍に導かれて
刑期を終える二年前、出所後に通う教会を見つけた

*1 刑務所で牧師や僧侶などの宗教家が受刑者に宗教教育をおこなうプログラム



天満小隊で兵士(信徒)になった時、聖書の学びを導いてくださった士官と

ければと思い始めました。教会については、どんなものか何もしりませんでした。教誨の先生に「出所後に通う教会がわからないので、紹介してください」と相談したところ、「自分が行くべき教会を示してください」と毎日祈りなさい」と言われました。

そんな時、読んでいた本に「救世軍」という言葉が出てきました。別の本にも救世軍のことが書かれていて、それが何冊も続き、これはいつかどういふことだろうと思いました。普段読んでいなかった雑誌を取り寄せてみると、そこには、大阪の阿倍野地下街に救世軍のカウンセリングルームがある、と書かれていて驚きました。

神様が示してくれているのだからかと思いい、教誨の先生に相談すると、「そうかもしれないね。それなら救

世軍を紹介しよう」と、大阪の天満小隊(教会にあたる)を紹介してくださいました。その小隊と手紙のやり取りが始まりました。しばらくして、天満小隊の士官(伝道者)の方から「一度あなたに会いに行きます」という手紙が来ました。刑務所では親族や身元引受人しか面会できないので、「やめておきましょう」と返事しました。ところが、「とりあえず行くだけ行きますから、あなたは祈っててください」と返ってきたので、「もし自分

が行くべき場所が救世軍なら、どうか面会を叶えてください」と祈りました。面会の日が来ました。刑務官から待機室に呼び出される際、「今日の面会は叶わないかと思っておけ」と言われました。だめかもしれないと思いつつ待ちました。五十分ぐらい経った時、扉

がガチャンと開いて、「吉田、面会許可」と。この時、自分は救世軍に行くことを確信しました。初めてお会いする士官の方に、「救世軍に入

隊させてください」とお願いしました。その方は「出所後に天満小隊に来て、少しずつ理解を深めていけばいい」と言ってくださいました。逮捕されてから十五年、四十五歳の時、出所となりました。出所前、両親が会いに来てくれました。十八年ぶりに顔を合わせました。私は面会室で手をついて深々と頭を下げ、涙と共に今までの親不孝を詫言、クリスチャンとして生きていくことを告げました。

出所して三日後の日曜に天満小隊に行きました。その時は奈良の更生保護施設に引き取ってもらっていて、天満小隊まで電車で一時間かかりました。毎週通いました。施設にいた人たちも、私が教会に行っていることを理解し始めました。毎晩ギャンブルに誘われましたが、「いや、自分はいいです」と断り続けました。施設には二十人ぐらいいますが、現在、社会に残っているのは自分を含めて三人で、他の人たちはまた刑務所に戻っていきました。自分が繋がる場所をもつことが大事だと感じます。初めて小隊の聖別会(礼

拝)に出席した時、小隊の信徒の方が「ご飯を食べていきなさい」と声をかけてくださいました。でも、教会というものを知らず、どう関わっていいかわからなかったのです。断りました。その後も誘われるたびに断り続けていました。ただ、声をかけてもらえるのは嬉しかったです。

結局、聖別会が終わるとスーパードーナツを買って近所の公園に行き、それを食べてお祈りして電車帰るという生活をしていました。刑務所では好きなものを食べられなかったので、自由になつたらバウムクーヘンを腹いっぱい食べたいと思っていたのです。そんなことを続けていたある日、誕生日を聞かれ、十二月と答えると、「十二月の誕生会にぜひ出席してください」と誘われ、それを機に以後、毎週の食事会に出るようになりました。また、小隊に行つて二回目から、礼拝の後、引退された士官の方の導きで聖書の学びをするようになりました。そのことが、後に天満小隊から士官学校に入校を許可される際に役立ったよう

です。その方が尽力してくださいましたことを、後に感じてました。

献身に導かれて

救世軍に通い始めてしばらくして、献身したいの思いが強くなりました。そんな時、デザイン・フォワー・ライフという集いに参加する機会が与えられました。そこで学びと面談から、自分の都合で献身を祈ることを悔い改めるとともに、神様からの召命を確認しました。神様からの恵みが全身からあふれ出るような感覚を味わいました。

士官学校に入るまでの間に、顔も知らない牧師先生方から信仰書を送っていたり、ご支援をいただいたりしました。先生方は自分を特定の教会に引張ろうとはせず、「あなたが行くべき場所で新しい人生を歩みなさい」というスタンスで接してくださいました。顔も知らない人たちが自分のためにこんなにしてくれるのだと感じ、自分も同じようにできる人になりたいと思いました。それが私の原動力になっています。士官学校では本格的に学びと

訓練を受け、現在は東京にある杉並小隊での働きのしています。

私は士官学校時代から受刑者に『ときのこえ』や信仰書を送っています。一人でも多くの受刑者にイエス様を伝えたいからです。いろいろな刑務所から返信の手紙が来るたびに、福音が広がっているのを感じます。自分が伝えたいことが人づてにまた誰かに伝えられていく、その瞬間が本当に嬉しいのです。

ある方から、「受刑者にひとこと言いたいことがあるとしたら何ですか?」と聞かれたことがありました。「五年後には、今聞いている皆さんの中の一人がこちら側にいて、話をしているかもしれない。それは全く不思議なことではない、と言いたいと思います」と答えました。

六十歳になつても七十歳になつても、クリスチャンとして受刑者に話すことは誰にでもできることです。あなたにもそれができる、皆が祭司(万人祭司)*4であるということをお伝えたいのです。それが今、自分が一番言いたいことです。

生涯を献げて伝道の働きにつきたい *3 救世軍でおこなわれる、「召命」—神の側からの献身への招き—について考える祈りと黙想のプログラム *4 キリスト教徒はすべて直接神とつながり、神の御業を伝えることができるとする、プロテスタント教会の根本的な教理のひとつ

創立者 ウィリアム・ブース 大將 リンドン・バッキンガム (万国本営 英国ロンドン) 日本司令官 スティーブ・モーリス (救世軍本営 東京都千代田区)



世界をみつめて

〈米国〉森林火災被災地への支援

アメリカ西部カリフォルニア州では、熱波と長引く干ばつが原因で、9月初めからロサンゼルス近郊などで大規模な森林火災が相次ぎ、一部の地域では非常事態宣言が出される事態となりました。南カリフォルニアの救世軍では、大きな被害を受けたサン・バナディーノ郡で緊急支援をおこないました。アメリカ赤十字との協力のもと、9月18日までに3つの避難所で3,370食の食事や飲み物を提供し、また、子ども支援の団体と協力して2つのシェルターにオムツを届けました。



〈ヨーロッパ(東部、中部)〉暴風雨「ボリス」被災地への対応

ヨーロッパの東部や中部では、9月半ばに暴風雨「ボリス」が発生し、ルーマニア、チェコ共和国、オーストリア、ポーランドなどの各国に影響を与えました。何千人もが避難し、各国であわせて21人が亡くなったほか、各地で洪水、浸水が発生し、停電や断水が起こるなど、甚大な被害となりました。

救世軍は各地で、食糧の配布、仮設シェルターでの避難場所の提供、住宅やコミュニティーセンターの清掃と復旧の支援をおこないました。

チェコの救世軍では、北モラビア地



チェコ 洪水で浸水被害を受けた小隊で祈る



ルーマニアでの食事支援

☆『キッズ・ゴスペル』コーナー☆ (子ども向け紙面)



左のQRコードから、今月の『キッズ・ゴスペル』を閲覧できます! 聖書のお話も動画で見られます。ぜひ、ご覧ください!

方の6都市で、いくつもの施設や小隊(教会にあたる)、地域本部が浸水し、避難を余儀なくされました。被害を免れた施設は被災者への食料支援などの拠点となりました。首都プラハの救世軍からは、多くのスタッフやボランティア

が清掃用具を持って被災地に向かい、支援にあたりました。

ルーマニアやポーランドでも、食事支援や避難シェルターの提供などをおこないました。各地の救世軍は、自治体や他の団体との協力のもと、支援と復興の手助けとなるよう尽力しています。

救世軍とは? What is The Salvation Army? 心は神に 手は人に Heart to God, Hand to Man

救世軍は、世界134の国で活動するプロテスタントのキリスト教会で、国際本部は英国ロンドンにあります。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウィリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で、困難な状況の中で生きる人々に助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

日本では1895(明治28)年に英国から士官(伝道者)が来日して救世軍の働きが始まりました。現在、全国40の小隊(教会にあたる)での伝道や子ども食堂などの地域奉仕とともに、2つの病院(ホスピス併設)、18の社会福祉施設を通して働きを進めています。社会福祉施設の分野は高齢者介護、女性自立支援、児童養護、保育、アルコール依存症者回復支援と多岐にわたっています。各施設では、キリスト教の精神に基づき、利用するお一人おひとりの存在を尊び、健やかな生活が保たれることを願いつつ、日々、活動しています。

社会鍋募金は救世軍の特色のひとつで、近年は多発する自然災害の被災者支援のため、年間を通してオンラインでも受け付けています。



11月30日は「社会鍋の日」

「社会鍋」は、様々な事情で困難な生活状況におかれた方々を支援するため、救世軍がおこなっている街頭募金運動です。三脚に吊るした鍋と紅白のたすきが目印で、クリスマスシーズンに主におこなわれ、俳句の季語にもなっています。毎年12月に開始する募金活動をアナウンスする日として、11月30日が「社会鍋の日」と認定されています。(一般社団法人日本記念日協会により)



救世軍公報 ときのごえ
発行日 福音版/毎月1日、広報版/奇数月15日
定価 福音版/1部40円、広報版/1部100円 (税込) クリスマス特集号(12月1日号)/1部100円
振替 00180-5-4400
発行兼 救世軍
印刷人 代表者 スティーブ・モーリス
編集人 山谷 真
発行所 救世軍本営 <https://www.salvationarmy.or.jp>
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話 03-3237-0881(代表)
Mail jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所 ピーアンドエス



聖書は新共同訳を使用しています ©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会 救世軍は、旧統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の中から該当する項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営(左記)、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
・私の近くの救世軍を紹介してください。 ・キリスト教についてもっと知りたいです。
・『ときのごえ』の購読を申し込みます。 ・相談を希望します。